

まで来ているかはわからないよ。まあ、行って見ましよう。

車を三分ほど走らせてから、リックは黙って指をさした。無人小屋のそばに、小さなものがある。ウサギだった。車をおり、近づいても逃げない。意外に短かい両耳の先端部分に黒いブチがはいっており、足は日本の野ウサギより長い。追うと、二本足で立ったままの姿勢でピョンと跳ぶ。

雪の上をさらに車で進むと、やがて道は行き止まりになり、大きなすり鉢状の窪地を見おろす場所に出た。夏には船がはいって来るフィヨルドが、窪地の向うに凍りついている。

リックが、私のひじをつついた。すぐ前方の岩が動いたように見えた。白いオオカミがゆっくりと窪地の底に向けて、おりようとしていた。一頭、ではない。うしろから、もう一頭、そして左手の台地から二頭。四頭の、小さな群なのだった。

外に出た私を、先頭のオオカミがうかがうように見上げた。白いフサフサとした毛。長い尾。一見、大型の犬と変わらないが、冷たい無表情な目が、どんな犬とも違っていった。

歩を速めはじめたオオカミを追って、私も窪地をおりる。こわいという気持は起きない。オオカミはふつう人間を襲わない、とレゾリユートで聞いていたせいもあったが、少しでも長くこの北極オオカミを観察していたいという気持が強かったのである。

しかし、表面だけがクラストした雪を踏み抜きながら、私の足は到底、四頭に



シロオオカミ。「Encyclopedia Canadiana, 1974」より。

は及ばない。オオカミたちは時折、こちらを振り向きながら、次第に小さくなっていった。わずかな時間でも、それは私にとって貴重な出会いであった。

* * *

イエローナイフを飛び立ち、はじめて茫漠とした北極の氷原を見おろした時、私にはここに人間はもろろん、生き物が生存することさえ、信じ難いことに思えた。さんざんドキュメンタリー・フィルムや、写真で知っていたはずの世界ではあったが、実際に目のあたりにした冬の北極は、すべて白エナメルでぬりつぶされた、無機質な広がりとしかうつらなかつたのである。南極と北極の重要な違いの一つは、人間が住むか否かにあるのだ

が、仮に北極圏に人の気配がないとしても、至極当然のようにこの時の私には思われた。

しかし、暗夜に閉ざされた真冬も、その後には続く白夜の早春も、北極グマやオオカミ、じゃこう牛が餌を求めてさまようように、人間たちもまた、不断の生の営みを、繰り広げている。この地の人々にはごく当り前のその事実が、温帯から飛んで来た私を、感動させた。

もちろん、暮し向きには、数十年前までと比較にならない変化が起きている。ヒーターつきの小さな家に住み、スノー・スクーターを乗りまわすエスキモールの青年に、イグルーと犬ぞりの生活を期待するのは、すでに無礼と言うべきであらう。

しかし、それでも日々の生活条件の厳しさを思い知らされるのは、たとえばブリザードについて百メートル離れた隣の家を訪ねる時である。氷点下四十度という気温の中で、町や村での日常的な行動は、それ自体しばしば「冒険」となり得る。猟期になって、家族ぐるみでアザラシやカリブー猟に出かける折には、一人一人が自然の中で生き抜く技術を要求されるだろう。

* * *

カナダ北部北極諸島の中心地、レゾリユート・ベイは、定期航空便と周辺諸島へのチャーター便基地として重要な新しい町である。ガソリンの匂いのするこの基地には約百五十人のエスキモーと、ほぼ同数の白人が住んでいるが、空港から五キロほど離れたエスキモー村に、リーバイという五十年配のエスキモーを訪ねた

ことがある。遠征に必要なアザラシ肉を手に入れたかったので、村きつての名ハンターである彼に、頼もうというわけであった。

心よく中に入れてくれたリーバイの家は、外はマイナス三十五度というのに、ヒーターでポカポカと暖かった。アザラシ肉特有のむっとくるニオイがたちこめていたのは、ちょうど幼い娘さんが一人で食事をしていたからだ(ナイフを使って肉を切り取る器用な手つきに、感心させられた。)

リーバイは、氷が割れて海面が出たら、アザラシ撃ちに行つてやろうと言ひ、こちらはホッとした。十五頭ぐらいなら、一か月以内に獲れるというのである。

氷がなかなか割れないのか、天気が良くないためなのか、リーバイは実際には腰を上げようとはしなかった。翌日も翌日も、夕方になるとビールが飲める町で唯一の場所、ホテルのクラブに現れ、夫人と小ビンを楽しんでいる。私と顔を合わせると、ニヤッと笑い、グラスを上げる。そのうち、こちらもおかしくなつて、彼の調子に合わせる結果になった。アザラシは別な場所から取り寄せ、リーバイとはビール友達になつたのである。

リーバイは北極グマ、セイウチ、アザラシ、カリブーなど大型の動物のハンティングに、輝やかしい戦果を残している。春になると、いまでもスノー・スクーターにまたがり、ライフルを背負つて、猟場へつっ走るが、昔ほど熱心でないのは、基地の仕事を手伝っているのと、政府からある程度の額の手当てをもらっているからだろう。